… 雨でも休まず；第１５６～１５７回 …

小原本陣の森、若柳・嵐山の森

●活動１：小原本陣の森：６月４日(第一土曜日)　参加費　３００円
「担い手育成の森：林業プロ集団」を目指す、駅から車分乗で行く。

●活動２：若柳嵐山の森：６月１９日(第三日曜日)　参加費　５００円
「森林と都市をつなぐ：里山交流の森つくり」を目指す。
今月「都会から来た普通の人々による国際認証の森つくり：予備審査」

＊活動終了後、第３期通常総会、於相模湖交流センター
総会終了後、親睦会　参加費１０００円

＊以上、必ず申込必要、TEL ＆ FAX　０３－３４１１－１６３６／事務局まで。

・初参加者：相模湖駅前：９時１５分まで待つ。８時42分、９時02分 ＪＲ高尾発。

・服　　装；汚れても良い格好・着替え　☞　足元が滑らない履物

・持 参 品；万一の怪我に備えて…保険証写し。そして、作業を楽しむ“ゆとり”と怪我をしない「心構え」

●活動３：甲州古道復活：６月２５日(第四土曜日)　参加費なし。
「都会の人々に荒廃の森林を知ってもらう仕組み」：詳細しＭＬで連絡

都会から来た普通の人々による国際認証の森つくり　…　予備審査

６月の第三日曜定例活動日に認証機関ＳＧＳが審査に来る。８年前、活動を開始した時にＷＷＦジャパン(世界自然保護基金日本委員会)の担当者から国際ＮＧＯ／ＦＳＣ(森林管理協議会)が「人間と森林が共生・調和する森林」という一定の条件を満たしていれば認証するという話であった。素人が森林の取り組みを間違ってはいけないし、どうせ森林に関わるなら何か目標があった方が良いと言うことで進めていた。

当会は“無理せず、休まず、急がす、楽しく、ボチボチと…”をモットーにしており、この８年間、一度も休まずその通りにした。予備審査は、小さな活動と考察を楽しくコツコツと積み上げた結果だから、自然に到達した、向こうからやってきたと感じている。認証機関ＳＧＳによるとズブの素人による森林認証は世界に例を見ないというが、空気や水を供給してくれる森林は、普通の人々が自覚してこそ、というのが当会の主張だ。思えば遠くに来たもんだ…、の感慨もある。

● 活動報告１：小原本陣／担い手育成の森：第一土曜日：5月7日

・天気予報では曇り後、晴れ。
予報通りになったこの日、大日向仲間などプロ級の１９人が集まった。

森の陽溜りでこの森の取り組みを話し合った

・二度目の活動日だから、森をシッカリと見ようと地域の大ベテラン永井宏一さんに案内して頂いて、大久保沢林道行き止まりから明王峠～与瀬神社に至るハイカー尾根に向けてシャニムニ、直登した。

この沢筋から尾根への両サイドの森の土壌は、小仏層群といって砂礫を含むもろいグザグザでキチンと手入れをしておかねば、地震でもあれば山津波になる恐れもある。
予想通り、針葉樹林は荒れて、最初の森に入った貝沢と同じ状況にあった。

尾根から左折して先月、踏査した美女谷尾根下部から通称、三十三曲がりと言われる沢筋を大久保沢まで下り、永井さんを交えて今後を話しあった結果、先ず、林道と大久保沢筋を整備しつつ県林務と相談して緊急間伐林に取り組む事とした。５月下旬、町と県の林務に来て貰って、施業計画を立てる事とする。

取り組みの基本的な考え方としてここの森は、森林技術の向上を目指し、県の進める「担い手育成の森」を考えている。

● 活動報告2：若柳嵐山／里山交流の森：第三日曜日：5月２５日

・　冬に戻っているのじゃないか？と思わせる肌寒い小雨模様。予報では午後晴れ。
望星高校、小川五色塾、武蔵工大の青年たち２３名を含む５５名参加。

望星高校生に間伐方法を教える

・　緊急を要する７齢級以下の森林整整備は３年を掛けて４地区を終了した。最終年Ｄ地区の整備は、ボランティアだからと手心を加えた検査は無用とした整備成果は見事だった。
今後の計画は、月末に町と県の林務に来て貰って現地状況を調べながら５ケ年計画を立てる事として、この日はＤ地区に入る手前の軟斜面の森で雪害の欠頂木や掛り木、倒木などの始末と、地表を暗くしている常緑樹の刈り取りをした。

- 望星高校や五色塾の青年たちには、園田隊長が間伐・林床整理などの森林整備の基本を教える事とした。隊長の軽妙洒脱にして分かりやすい指導に初参加の青年たちも喜々として作業を楽しんでいた。
隊長と知り合った８年前当初、森林地域の過疎化と高齢化から森を守に担い手がいなくなっている事を何んとかしなければならないと話し合ったものだか、この森に若い人達が大勢、出入りするようになって技術指導の出来る事を園田隊長は嬉しいらしい。俺いらとしても彼の楽しげな様子が嬉しい。
- 来年から始まる神奈川県の「水源環境の保全・再生」の中に“里山交流”が盛り込まれており来年以降当会はこれも取り組みたいと思っている。森林整備の技術は未だ未だが、この８年間で従来の森林とは異なるＦＳＣのガイドラインによる生態系調査、緑のダム学校に見る環境教育、木質バイオマスエネルギー開発、間伐材活用住宅など新しい視点での技術を身に付けて来た。このような取り組みを進めたい。

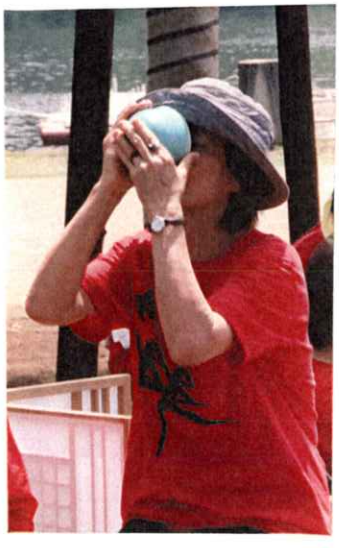
梅林の中でＦＳＣの審査に備える

- 昼食後、篠田仲間等、ＦＳＣ推進班が来月、審査を受けるために造園班の梅林の中で最終チェックに余念が無かった。“石村さん、チョット・チョット、チェックしてよ～”の声を掛けられたが“あ～、ここは気持ちの良い梅林だなぁ～”とか反応したら“石村さんは気楽なもんだなぁ～”と笑われた。

- 活動終了間際に軟斜面の作業の進み具合を見に行った。緊急間伐で腕を上げたプロ級／大日向、田野口仲間等がチェンソーで切り開き、その後を辻田、入江仲間が初心者グループを指揮しながら林床整理をする。

チームが機能して阿吽の呼吸で森が見る見る変身して行く。この森は間違いなく、世界でトップクラスと評価されているわが国第一号のＦＳＣ認証の森になったあの「速水林業の森」に近付いていると実感した。

● 臨時の活動報告１：**相模湖町やまなみ祭**：４月２９日：緑の日祭日



緑の日祭日：４月２９日は快晴と決っている。

毎度の“鋸引き体験”はややマンネリ化の傾向にあり、今年は昨年人気のお茶席に絞って参加した。

栗田くみ仲間と吉田英子仲間にご亭主主をお願いした。茶席も定番になって、中里利夫さんや溝口町長などの名士が多数、客になってくれた。

● 臨時の活動報告２：**第２回：川崎ネイチャーフェスティバル**

４月１９日に座学「森林・林業再生システム研究会」を開催した。これを実務に生かすために川崎市の新鶴見操車場跡地で実施した。このイベントは、県産材を流通させる仕組みつくりをしたいとして「森林と都市をつなぐ」をテーマに、川崎市の市民グループ：幸町つくり研究会と共催した。

津久井土木事務所から貰った木で作った「組立式イベントステージと組立式キット小屋」を出品したが、大人気。遠くから上流の“大月市甲斐東部材協同組合、大月森つくりの会、北都留森林組合”や仲間内の「緑のダム北相模、緑のダム北鎌倉」が協賛参加してくれた。県産材のこの広報イベントを神奈川県、川崎市、ＪＲ貨物が後援してくれて、松沢神奈川県知事、阿部川崎市長からも励ましのメッセージを受け取った。知事のメッセージを以下に報告する。

第２回ネイチャーフェスティバル」の開催、おめでとうございます。
森林環境の保全を目的に、県産材の利用や水の大切さを県民とともに考え、理解を深めるイベントを都市地域の川崎市において盛大に開催されますことは誠に意義深いものがあります。
この催しが、県民のご理解をいただき、森林地域の住民と都市地域の住民が力を合わせ、森林の生成、創造の活動に繋がることをご期待申し上げます。
最後に、これまで尽力された実行委員会やＮＰＯの皆様に深く敬意を表しますとともに今後もネイチャーフェスティバルがますますご発展されますことをこころからお祈り申し上げます。　　神奈川県知事　松沢　成文

都会のド真ん中に出て森を訴える。
いずれここに森を作りたいなどと夢を見ている。

寒からず暑からずの穏やかな晴れのこの日、会場には３０００人を越す来場者で賑わった。全く、有り難いことに津久井地域行政センターの小林所長始め、斉藤林務部長など幹部の方々、本庁の山中森林課長代理など沢山の県の森林関係者の方々が励ましに訪ねて来て下さった。

この日、キット小屋３件、ステージ１件の引き合いがあり、県産材で家を建てたい人１件とは、５月下旬から話し合いに入るが、行Ｃ森林課と一緒に県産材の搬出から建築までを一緒に考え行動する計画だ。

…　第四期の活動の方向　…

● 第三期通常総会：6月１９日、活動終了後、於：相模湖交流センター

今年の活動の方向だが、来年から施行される「水源環境の保全・再生策」との協働団体として期待されているからには、受けて立てる準備の年にしたい。政策の中で当会が出来るものは、ＦＳＣで取り組んできた里山交流としての森林整備、生態系との調和・共生、緑のダム学校／環境教育、或いは新しい発想による間伐材を生かす手法開発など。夫々ではあるが「森林破壊という負の遺産を子孫に残さない」という一つの使命を目指しているから当統制の取れた活動になっている。全く大人感覚の活動には頭の下がる思いがする。こんな感じて今年も存分に活躍して欲しい。８年前に月尾嘉男先生（元総務省審議官、現東大大学院名誉教授）から「ボランティア活動は世論が動かせる。やって見ろ」と言われて、そうなったと言う感じだ。

緑のダム北相模がFSCの森林認証を取る意味について

NPO緑のダム北相模

文・写真＝園田安男（NPO緑のダム北相模理事、花咲村代表）

NPO法人「緑のダム北相模」は以前からFSC森林認証を取ろう、と言ってきた。最初はおぼろげだったが、最近になって手ごたえを感じるようになり、ついに今年の春には予備審査に入るところまで辿り着いた。

計画当初は、われわれにとっての森づくりの指針が必要と考え、WWF（世界自然保護基金）が積極的に進めているFSC森林認証を参考にしていきたいという程度の思いだった。それに、森林活動に箔がつくという下心もあった。しかし、もっと本質的に認証が必要だということが、今日までの議論の過程で見えてきました。

そもそも、森林認証という考え方は、消費する人たちにその木材の出所、育ち方を見えるようにするというものだ。略奪的な、森林破壊をともなう方法によって木材が出てくる、いうなれば「安さ」という価値でしか評価されないものに、違う価値体系を持ち込もうというのが森林認証である。それによって、自然を痛めるように行われる木材生産に待ったをかけ、持続可能な、環境と地域に配慮した森林経営を積極的に進めていくという「森林経営の新しい方向」を促そうとしている。つまり、木材などの林産物に「環境と地域に配慮した森づくりによって生み出された」という付加価値をつけるのである。認証された森林から得られた木材資源にFSCのラベルを貼って、「育ちの違い」を明らかにするものだ。

市民による森づくり活動にとっての意味

木材生産を第一義的にしてはいない、われわれのような「市民参加の森づくり」を看板にしたボランティア活動に対して、どうして木材の付加価値を高めるための認証を必要とするのか理解できないという意見もある。ましてや、今の国産材不況のなかで、森林認証に一体どれほどの効果があるか疑問だ、と思うのも不思議ではない。確かに認証が消費傾向を大きく変えるものになるかどうかは不明である。しかし、ここには木材に付加価値がつくこと以上に大切なものがある。それは、森づくりを「公的なものと意識して行う」ということだ。

FSC認証を受ける作業を通して、われわれが身につけようとしていることは、「計画を持つ」「施業のマニュアルを持つ」、「モニタリングをする」「情報を公開する」ということ。私は、特に情報を公開するということに大きな意味を感じている。

以前、森林組合で仕事をしているおじさんたちにいろんな話を聞いたことがある。そのときの話の中で、山につける値段の基準は何か、という話が出た。すると、彼らはこう答えた。「その山の見た目だけでなく、持ち主は誰で、誰が手入れしてきたか」「この人の山は丁寧にやっているからよい材になっているはず」、ということで値段をつけていたという。つまり、記録がないので「人」を見ていたのである。「出所、育ち方を見る」という原則は認証と同じ考えである。

FSC森林認証を取得するということは、とにかく「みんなに説明できる森づくりをする」ということ。人々の生活と森林の距離がどんどん離れてしまう現在にあっては、これはとても重要なことである。森林所有者が森づくりの意志を明らかにし、内容を社会的に公開していかねばならない。われわれがやろうとしているのは「消費」あるいは「環境保全」を媒介にして、新しい森林とのつながり方を作ろうということだ。

結果として、森林を保全するという公的な役目を個人に負担させるだけでは無理だ、という考えも理解されやすくなる。「ただの私有物ではなく、社会的財産としての森林」という意識を社会の了解事項として育んでいくことが期待できる。

認証の準備過程も市民参加

さて、森林認証を得ようとするときの大きな問題、それは認証手続きに手間暇がかかる、という現実的な問題だ。ただ、認証を受けることだけが目的であればどこからか資金助成を受け、専門家を雇い、結果として認証がかなうという方法もあり得る。しかし、われわれは認証を受けることを自己目的化しているのではない。素人がやる、その過程に意味がある。あくまでも「市民参加」なのである。

「市民参加」ということから、もうひとつ原則的な取り組み方を確認しておく。それは、認証されることを自己目的化しないということ。つまり、認証基準にわれわれの活動をあわせるのではなく、われわれの活動に認証基準を引き寄せることが大切となる。認証に必要だからこの書類を作らねば、ではなく、認証基準を参考にしてわれわれに必要なものから作っていき、その後、認証に足りないものを整えるという手順である。さらに重要なのは、認証までの作業を楽しんでやるということ。これは、これまでも緑のダム北相模がやってきたスタイルである。義務感でやっていれば楽しくない。楽しんでやらなければ持続しない。

課題の大きいものに取り組もうとしたら、何よりも動機をはっきりさせること、今風にいえば、モチベーションを高めるということだろう。そして「楽しんでやる」「少数の専門家だけでなく多くの人たちが参加してやる」。この姿勢こそが、われわれそのものなのだ。

森林認証の先にあるもの

森林認証を取ることを自己目的化しないと言った。それは、その先があるということでもある。つまり、認証基準をそれ以後もきちんと守っていく必要があり、そのためには人材が必要となる。ここが重要だ。

今、森林を守る人たちが高齢化して、人がいないと言われている。ところが、一方では森林や環境に関心を持ち、現場で働きたいという若い人たちもいる。つまり、森づくり全般の知識がある働き手を育てていかない限り、今の時代に相応する「山の担い手」は生まれてはこないのである。私たちは森林認証の先にあるものとして、この認証基準を体現できる新しい「山の担い手」を育んでいきたいと思っている。山の現場作業ができることはもちろん、ある程度の植生や生き物にも知識がある、森林によって地域に貢献しようとする意志を持った森林官、ニューフォレスターの登場を期待している。

山主の鈴木氏（左）と園田氏

FSC ◀FSCのロゴマーク

NPO緑のダム北相模
〒154-0023 東京都世田谷区若林3-35-9
自然科学研究所 石村黄仁
TEL. 03-3411-1636
http://www008.upp.so-net.ne.jp/kitasagami/

相模湖の今昔（1）

川岸段丘下を流れくだっていた往時の相模川は、津久井郡のように山峡の地形では陸路交通により河川を利用した水運が盛んでした。津久井湖の湖底の荒川には番所、奥畑下には川通改所があり、物資流通の取締や人改めが行われていました。

近世に於いては、相模川は津久井の産物や木材などの運搬の重要な交通経路であり、また、人の上流と下流の往来のための交通機関でした。

往時、相模川の水運にあたった舟は高瀬舟（平田舟）といわれ、長さ６～７間（１２～１４ｍ）の帆掛け船で材木以外の貨客が運ばれていました。一般に３人の船頭がふねを操り相模川を上下していました。１６８９年の記録によると、長さ6間（１０.8m）幅5尺（1.5m）深さ2尺3寸（６９cm）の高瀬舟は米俵３０～４０俵を積んだようです。

木材や板材の搬出は、筏にして流しました。相模川の上流や山梨県都留地域からバラバラに流し、相模川と道志川の合流点の沼本で、木材量１３石位いの筏に組み直し、一人づつの筏師がついて流しました。

さらに、津久井町の荒川で筏は、通常長さ８間（１４.4m）幅１０尺（3.3m）石数２６石にも及ぶ大きさに組み替えて一人の筏師が操って流しました。

交易地は厚木や平塚が主で、１日～２日で到着、帰路は徒歩で引き返しました。筏流しは相模ダムが着工する昭和１５年以前まで続きました。筏流しは、１０月から翌年６月までの仕事で、筏師の多くは夏は鮎釣りをしていました。

（文責　中里）

後　記　単なる一森林ボランティア活動として始まった筈だが、気が付いたら神奈川県と協働して事業を進める団体にまでなってしまっている。そして最近、不思議で仕方がないのが人・もの・金・情報が一人でに準備されてくることだ。

もう、一人では手が回らないと思っていたら東電定年退職の石橋さんがアシストしてくれることになった。

もう一ケ所新しいフィールドが欲しいと思ったら「小原本陣の森」が出来た。

もう少し事業を大きくしたいと思ったら神奈川県が「神奈川ボランタリー基金２１」で資金を準備してくれた。ＦＳＣは篠田仲間をリーダーに班を作ってドンドン、情報集めをして書類審査に備えてくれる。

森は全てのことを準備して待ってくれているらしい。

---

1)　６月４日(第一土曜日)：小原本陣の森
　　弁当持参、参加費３００
　　駅から車分乗で行く。

2)　６月19日(第三日曜日)：若柳嵐山の森
　　主食・食器のみ持参、参加費５００
　　この日：ＦＳＣ予備審査

＊活動終了後、第３期通常総会・
　総会終了後、親睦会

モットー／休まず、無理せず、急がす、楽しく、ボチボチと
　　そして、沢山のご意見、参加下さい。

名　　称／さがみ湖・森つくりの会(NPO法人緑のダム北相模/森林部会)　2)

事務局／〒154-0023 世田谷区若林３－３５－９
　　自然科学研究所内、石村　黄仁

Ｔ＆Ｆ／０３－３４１１－１６３６

協働団体／セブン-イレブンみどりの基金
神奈川県（企画部・環境農政部）

当会の森林整備活動は、左記の団体と協働事業として実施しています。

ＨＰ：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ００８．ｕｐｐ．ｓｏ－ｎｅｔ．ｊｐ／ｋｉｔａｓａｍｉ

支　援　団　体：世界自然保護基金日本委員会、神奈川社会チャレンジ基金、損保ジャパン環境財団、
　　日本財団、